

構造化理論から知識の社会学へ（一）

倉田 良樹

- 一 本論文の課題
 - 一・一 主意主義・物象化を超える…ギデنزにとつての課題
 - 一・二 ギデنزの構造化理論…マルクスの警句から
 - 一・三 本論文の課題と構成
- 二 二重性
 - 二・一 二元論から二重性へ
 - 二・二 二重性概念の社会理論的な意義
 - 二・三 二重性概念をめぐるポストギデنزの議論
- 三 行為主体性
 - 三・一 定義
 - 三・二 行為の階層性について

三・三 行為における条件と帰結の循環
(以上本号)

三・四 行為主体性をめぐるポストゲンズの議論
四 構造

五 構造化理論から知識の社会学へ

六 雇用関係の社会理論に向けて

一 本論文の課題

本論文の課題は、一九七〇年代の英国で生まれた社会理論である「構造化理論」の概念と枠組みを批判的に検討しながら、これを独自の視点から読み換えていき、「知識の社会学」という枠組みに発展させていくための方途を探っていくことにある。「知識の社会学」によって筆者が目指すのは、現代社会の雇用関係の具体的な事象を分析できる確かな理論的地盤を築くことにある。ただし「知識の社会学」の全容を示して、それによる雇用関係の現実的な事象を分析する本格的な作業については、次の機会にゆだね、本論文では構造化理論の批判的な検討を通じて、知識の社会学に続く理路を切り開いていくことに専心する。

一・一 主意主義・物象化を超える…ギデンスにとっての課題

構造化理論はその創始者である英国人社会学者 Anthony Giddens の名とともに知られている。一九八〇年代半ばまでに構造化理論のほぼ全容を提示した⁽¹⁾Giddens 自身は、その後期の著述においてはもはや社会理論プロパーの世界に沈潜することはなく、一方では史的唯物論に代替する歴史社会学のプロジェクト⁽²⁾に取り組み、さらには、グローバルゼーション、生の政治、親密性の変容など、後期モダニティとしての現代社会で生起している具体的な諸事象を対象とした研究業績を次々と生み出していった。⁽³⁾これに続いてGiddens は、『第三の道』の刊行（一九九八年）を皮切りに英国労働党の政策ブレインとして、現代社会の具体的な政策課題に関する研究に力点を移すようになった。⁽⁴⁾そしてGiddens 自身は、これら後期の著作の中で、新たな研究テーマに取り組むにあたって、それぞれのテーマのなかで構造化理論がどのような位置を占めているのかについて、きちんとした説明を行うことが少なかった。それどころか、後期の著作の中でGiddens が行っている構造化理論への言及に対しては、その曖昧さや、前期の所論との矛盾を指摘した批判が提出されるようになっていく。たとえばStones は「（後期の著作において）Giddens は、歴史社会学、モダニティの制度的過程と輪郭、後期モダニティにおける政治圏域内部の軌跡と可能性に関して、幅広い領域にわたる実質的な探求を行っているが、これらの大部分は、Giddens 自身がほのめかしているのとは相違して、いかなる重要な意味においても構造化理論に依存した研究であるとは言えない」と述べ、⁽⁵⁾構造化理論と後期Giddens の著作との理論的なつながりをはっきりと否定している。さらには、構造化理論をめぐる論争に関しては、本来これに対する応答を行うべき最もふさわしい立場にあるはずのGiddens 自身が、ある時期を過ぎるとこの論争から身を遠ざけるようになっていくこともあり、後期

Giddens の著述を検討することを通じて構造化理論の理解をさらに深めていく道は閉ざされてしまっている。

他方、日本ではその意義がまだ充分に認知されていないが、一九八〇年代以後、英語圏の社会科学の世界では、構造化理論をめぐってきわめて有望な研究状況が展開している。構造化理論の全容が明らかになった一九八〇年代半ば以降、構造化理論の新しい可能性を、Giddens 自身の意図とは幾分異なる方向で、すなわち、これを単なる抽象的な社会的存在論のレベルに止めることなく、経験科学的な研究に応用していくという方向で発展させていく試みが登場してきた。こうした研究動向はポストモダニズムの構造化理論と呼ぶことができるような活況をもたらしている。Giddens による構造化理論の諸概念や概念枠組みを活用して経験科学的な分析を行った主要な著作として、例えば、Stones による一九六〇年代の英国労働党政権の金融政策の経緯に関する研究⁽⁶⁾、Spybe による一九七〇年代ヨークシャーの毛織物工場における職場の管理構造に関する事例研究⁽⁷⁾、Carabine による一九六五年から一九九〇年に至るマンチェスター市における刑務所の管理統制の変容に関する経時分析⁽⁸⁾、Coopey らによる現代英国企業の組織の革新過程におけるエイジェントとしての管理者の役割に関する事例研究⁽⁹⁾、Orlikowski によるコンピュータソフトウェア技術の開発側と活用側の相互行為を構造化理論で分析したエスノグラフィックな研究⁽¹⁰⁾などがある。これらの経験科学的な研究のなかではGiddens の構造化理論に内在する抽象的存在論に後退しがちな弱点を補強していくための理論的な考察も包含されている。構造化理論を経験科学的に応用する研究が活況を呈するのと並行して、理論研究の世界においても、構造化理論に対する批判的な検討⁽¹¹⁾が行われており、これらの研究の成果を踏まえて、構造化理論を独自にヴァージョンアップさせることを目指した研究も登場している⁽¹²⁾。

後の章で詳述するように、Giddens 以来の構造化理論がもたらした社会科学研究上の最大の成果は、「社会とは何か」という問いに対して、社会全体を特徴付ける構造 structure からアプローチしていくのか、それとも社会の

構成要素である個々の行為主体 agency からアプローチしていくのか、という、十九世紀以来の西欧社会科学が長年取り組んできながら、なかなか答えを出すことができずにいた理論的な難問に、曲がりなりにも一つの可能な解決を与えつつある、という点にある。やや単純化して言えば、西欧の社会科学は、社会で生起している事象を説明するにあたって、社会の構造を過度に重視して、行為主体の果たす因果的効力を評価しようとする「物象化」reificationという傾向、そしてその反対に、行為者の自由な選択という側面を過度に重視して、構造が行為主体に及ぼす因果的効力を見ようとしないう意主義 voluntarism という傾向に挟撃されてきた。理論社会学の世界においても、例えば Parsons などの人物は物象化と意主義がいずれも社会に対する正しい認識を妨げる偏向であることを正しく認識して、構造と行為主体の関係を調停することができる社会理論を構築することを試みたが、Giddens も指摘するように、その試みは中途半端なところに止まっていた。

Cambridge 大学において、批判的実在論と呼ばれる独自の社会的存在論を主導してきた Blaskar は物象化と意主義を現代の社会科学が陥りがちな両極の還元論 reductionism 的誤謬、すなわち社会を個人に還元させたり、個人を社会に還元させたりすることで、社会が関係性から成り立つ実在であることを見えなくしてしまう誤謬であることを明らかにしている。Blaskar によれば、こうした誤謬は、社会科学の伝統に深く根ざしたものであって、物象化の伝統は Durkheim 以来の潮流であり、意主義の伝統は Weber 以来の潮流であると簡潔に整理している。¹³

物象化か意主義かという二項対立図式による Blaskar の簡潔な整理は、西欧社会科学の伝統を理解するための有効な視座を提供しており、Giddens が格闘した構造か行為かという二項対立図式と正確に対応している。だが他方では、Marx、Durkheim、Weber など、西欧社会科学の開祖たちが行った理論構築の作業においては、構

造と行為主体のいずれの側から社会理論を構築していくか、という選択は、科学的な思索を厳しく突き詰めていく中で遂行されているという点を正しく認識しておくこともまた、必要である。これら社会科学の巨人たちの著述においては、科学的な考察は極めて厳密に遂行されたにもかかわらず、あるいは極めて厳密に遂行されたからこそ、そこに深刻な矛盾が残されることとなった。Giddensが行ったのは、巨人たちの著述に残された深刻な矛盾に向き合い、テキストを「著者に反して読む」ことで、社会と個人、構造と行為主体の関係をより深い地点に遡って統一的に把握する試みであった。例えば、Giddensは、社会的事実の拘束力を強調すること¹⁴で、Blaskarから物象化というラベルを与えられたDurkheimの著作のなかにも、行為主体の「道徳的個人主義」が社会を動かしていく自律的な作用に関して肯定的に論じた優れた論述が含まれていることを指摘している。Giddensは「MarxをMarxに反して読む」「WeberをWeberに反して読む」、といった独自のテキスト解読に取り組み、ことを通じて、構造化理論を作り上げている。本論文では、構造化理論のプロジェクトをさらに前進させ、その一つの有望な理路として「知識の社会学」という構想を示していきたい。こうした作業を遂行するためには、Giddensに倣って構造化理論の論述のなかに潜む矛盾を発見し、「GiddensをGiddensに反して読む」ことでの矛盾を解消していくような努力が不可欠である。

一・二 ギデンズの構造化理論…マルクスの警句から

Giddensのアカデミックな業績は、およそ一九八〇年代の半ばを境に、前半期と後半期に分けて理解することができる。本論文の課題である構造化理論に関するGiddensの主要な著作は、前半期においてすべて出尽くして

いる。Giddens の最初の著作である『資本主義と近代社会理論』⁽¹⁵⁾は、近代資本主義社会の成立との関係で Marx、Durkheim、Weber の社会理論のエッセンスを考察した優れたコメンタリーであり、ここではモダニティの学としての社会学の始まりに関する確な理解が示されている。こうして Giddens は、社会学者としてきわめてオーソドックスな地点から出発したのではあるが、その後の歩みのなかでは、社会学プロパーの領域に止まることはなかった。哲学、言語学、人類学、心理学、精神分析学、地理学などの多岐にわたる先端的学説を取り上げ、これらに独創的なテキスト読解を加えることで、自らの社会理論を構造化理論 Structuration Theory として纏めていった。それでは構造化理論とはどのような理論であるのか。始めに構造化理論に関する具体的なイメージを与えることを試み、前項で取り上げた Giddens にとっての課題がどのようなものであったか、その問題の所在をはっきりと示そう。

Giddens は、自身の社会理論の全容を提示することを試みた構造化理論の集大成と呼ぶべき著作である『社会の構成』の序論において、歴史における人間の行為主体性 agency に言及した Marx の次のような警句を引用して、構造化理論の発想の原点がどのようなものであるのか、読者の直感に訴えかけることを試みている。⁽¹⁶⁾引用されている警句は『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』の中の「人間は自分自身の歴史を創るが、しかし、自発的に、自分で選んだ状況の下で歴史を創るのではなく、すぐ目の前にある、与えられた、過去から受け渡された状況の下でそうするのである。」という一節である。直感的には誰もが否定することのできないこの警句を⁽¹⁷⁾構造化理論を開示するにあたっての前奏曲として示すことで、Giddens が喚起しようとしているのは、歴史における人間の行為主体性を説明する、以下の三つの論点であるように思われる。

(1) 人間は決して与えられた歴史的な制約条件によって一方的に流されていくだけの受動的な存在ではない。歴史を創るのは行為主体としての人間である。

(2) とはいえ人間はフリーハンドで歴史を創れるわけではなく、歴史を創るさいの人間の行為主体性は、過去から引き継がれた条件により制約されながら、発現する。

(3) 人間の行為主体性に対する制約条件は、過去から現在に向かう時間によって経時的に受け継がれる。ここから読み取るべきこの警句のもう一つの含意は、現在における人間の行為がもたらす帰結は、未来の人間が行為を選択する際の歴史的な制約条件として引き渡されていく、ということである。

『ブリュメール十八日』の警句の含意を以上のように整理したうえで、Marxがいう「歴史的な制約条件」を「構造」Structureという用語で置き換えてみよう。こうすることで、Marxの警句を構造化理論のプロジェクトの冒頭においてGiddensが、何を示そうとしたのかを正確に読み取ることが可能になる。先の三つの論点はそれぞれ次のように言い換えることができるだろう。

(1) 人間の行為は構造によって一方的に決定されているのではない。人間の主体的な行為は、その結果として社会の構造を再生産したり変容させたりすることのできる因果的な効力を持っている。

(2) とはいえ人間は所与の社会構造から影響されることなく、フリーハンドで行為を選択できるわけではない。人間は構造を媒体とすることによって、つまり構造から制約され、また構造から可能性を付与されることによって、自らの行為主体性を発現させている。

（3） 以上のように、人間の行為は構造を媒体とすることによって実現され、その結果として構造を再生産したり、変容させたりする、という循環する繰り返しのなかで、途切れることなく継続されている。構造が行為を作っているのか、それとも行為が構造を作っているのか、という二元論 dualism のいずれからも、人間の社会を基礎付けることはできない。人間の社会は、それが通時的に継続するなかで、構造と行為が循環しながら相互に作りあう mutual constitution 関係として、つまり二重性 duality の関係として把握することしかできない。

一・三 本論文の課題と構成

前項の最後で示した三点が、ぎりぎりに引き絞った Giddens による構造化理論のエッセンスである。ここから出発して構造化理論の批判的な検討を行い、そこから「知識の社会学」へと繋げる理路を切り開いていくことが本論文の課題である。本論文の前半（本号）では、構造化理論を構成する二つの中心概念である「行為主体性」と「構造」ならびに両者の間の「二重性」という概念に焦点を当て、Giddens とその批判者、継承者たちのテキストを解読していく。構造化理論においては、「二重性」の概念を厳密に理解することなしには、「行為主体性」および「構造」の意味を正しく掴むことはできない。そこで考察は「二重性」、「行為主体性」、「構造」の順に進められる。またこれら中心概念のそれぞれに関して、ポストギデنزの研究者たちが Giddens の構造化理論をどのように批判し、どのように継承しようとしているのかについても考察する。本論文の後半においては、ポストギデنزの構造化理論が切り開きつつある理路を、「知識の社会学」としてとらえ、その概略を記述するとともに、若

千の事例を挙げて知識の社会学に基づく雇用関係研究の試論を提示する。

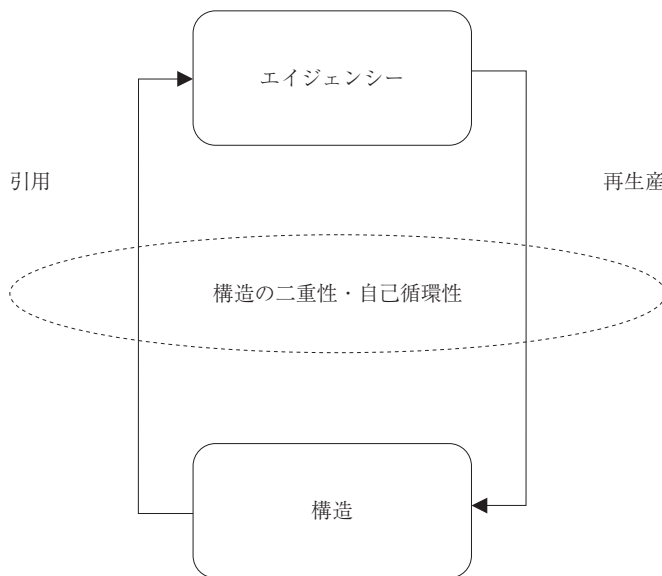
二 二重性

二・一 二元論から二重性へ

社会理論としての構造化理論が持つ最大の独創性は、「そもそも社会が存在するとはどのようなことであるのか」という存在論的な究極の問いを立て、「社会は構造と行為の両者が相互を作りあう二重性 duality の関係として存在している」という独自の社会的存在論に基づいて理論を展開していることである。Giddens は社会に関するこのような存在論から出発して、これまでの西欧社会科学が陥りがちであった認識論的な二元論 dualism による基礎付け主義 foundationalism がもたらす両極的な誤謬、すなわち、「社会を構成している構造が個人の行為を決定している」という物象化の過ちと、「社会とは主体的に選択する個人の行為の結果であって、社会構造は個人の行為に還元することができると」という主意主義の過ちを二つともに拒絶して、従来とは全く異なる方向で社会理論を構築することを目指している。二元論と対置される二重性という概念は、Giddens の社会理論を理解するための出発点であり、その意味するところを厳密に理解しておくことが必要である。

構造の二重性について Giddens は次のように簡潔に表現している。「構造の二重性」ということで私が言うとしているのは、社会構造は人間の行為主体性¹⁸⁾によって作られていると同時にそれを作り出す媒体でもある、と二つ二つである。」Giddens はさらに別の箇所では、上記のような構造と行為主体性が相互に作りあ

図1 構造の二重性による構造化のサイクル



二重性の関係について、行為という概念を社会的実践という言葉で置き換えて、次のように説明している。「構造の二重性とは、社会生活が社会的実践の中で構成されるさいの本質的な循環性 *recursiveness* のことを指している。すなわち、構造は実践が再生産されるための媒体であるとともに、実践が再生産されることの結果でもある」¹⁹⁾ *recursiveness* という用語は「繰り返す」と訳すことも可能だが、「構造を媒介してなされた行為が構造を再生産する」という構造化サイクルの繰り返しが本質的に自己循環的な運動であることを強調するために、本論文では敢えて「循環性」という訳語を充てることにしたい。従って、構造と行為主体性（エイジェンシー）に関する「二重性」の関係については、図1のような循環図式として整理しておくことにする。

構造の二重性または社会的実践の再生産を説明するために、最も基本的で最も明白な事例として Giddens がしばしば取り上げるのが、言語の事例である。

「私がある文章を発話するとき、そうするために私は

様々な統語論的規則（それらは言語に関する私の実践的な意識のなかに沈殿している）を引用している。言語に関するこのような構造的側面は、それらを通じて私が発話を作り出す媒体である。しかし統語論的に正しい発話をする⁽²⁰⁾ことで、私は同時にその言語を全体として再生産することに貢献している。」

主体の行為（発話行為）が一定の構造（言語の統語論的規則）を媒体として行われると同時に、その行為の結果として構造が再生産される、という自己循環的、あるいは再帰的な関係が Giddens のいう構造の二重性である。二重性という概念は、具体的な発話行為（パロール）と発話の背後にあって意味の伝達を支えている規則（ラング）という Saussure の言語学に準拠して示されている。だが、言語への言及は、Giddens にとっては、構造に関する重要ではあるが一つの側面の説明に過ぎない。Giddens は「社会が言語に似ている」という理由に基づいて言語からすべての社会事象を説明する、という言語論的な還元の方で議論を進めようとはしない。「言語は社会において極めて中心的な役割を果たしている⁽²¹⁾ので、すべての社会活動のある側面を例示している」という理由で、言語における発話と規則の関係を一つの有効な具体例として示し、行為と構造の関係を説明しているのである。従って Giddens にとって構造概念は、言語コミュニケーションにおける規則に尽きるものではない。Giddens は社会を説明するうえで構造という概念をもっと幅広く活用していこうとしている。

言語によるコミュニケーション行為は、社会を成立させる意味作用 *signification* という構造の二重性を循環させていく行為であるが、Giddens によれば、社会は意味作用という構造の二重性だけで動いているのではなく、人間の相互行為が支配 *domination* と正統化 *legitimation* という二つの構造の二重性を自己循環的に作り出すことによって成り立っている。支配という構造に関していえば、特定の支配構造のもとにいる行為者はその構造を媒体として権力 *power* に関わる相互行為を実践し、そうすることを通じて支配構造を再生産している⁽²²⁾。

また、正統化という構造に関していえば、特定の正統化構造を受容している行為者は、その構造を媒体として道徳的な裁定 sanction に関わる相互行為を実践し、そうすることを通じてその正統化構造を再生産するのである。⁽²³⁾

意味作用、支配、正統化、という三つの構造は、社会の背後にあるヴァーチャルな存在であるが、行為者がこれを媒体としてコミュニケーション、権力、道徳的裁定に関わるアクチュアルな相互行為を実践することによって自己循環的なサイクルのなかで再生産され、継続していく。Giddens はこのように、三つの構造に関する「二重性」の自己循環サイクルによって社会の動態をとらえようとしているのである。相互行為が構造を媒介する様式 modality に関しては、それぞれの構造にに応じて、解釈図式 interpretative schema、便益 facility、規範 norm という概念が割り当てられている。⁽²⁴⁾ コミュニケーションに関わる相互行為は、解釈図式という様式を用いて、媒体である意味作用の構造を引用し、そうすることで意味作用の構造を再生産する。権力に関わる相互行為は、便益という様式を用いて、支配の構造を引用し、そうすることで支配の構造を再生産する。道徳的裁定に関わる相互行為は、規範という様式を用いて、正統性の構造を引用し、そうすることで正統性の構造を再生産する。

さて、以上でようやく二重性を説明するためのそれぞれ三つの概念から構成される三組の概念セットが出揃ったことになる。すなわち、①相互行為に関する概念セットとしてのコミュニケーション、権力、サンクション、②構造に関する概念セットとしての意味作用、支配、正統化、③媒介様式に関する概念セットとしての解釈図式、便益、規範がそれである。概念セットがあまりにも重たいことから Giddens の意図するところを見失ってしまいくそうになるが、そうならないために簡単に補足すれば、①、②、③のいずれに関しても、なかに入っている三つの概念が現実の社会に実在している言語、貨幣、法におおむね対応している、ということを指摘しておこう。⁽²⁵⁾

三つの相互行為、三つの構造、三つの媒介様式が再生産される二重性のサイクルは、構造化理論の心臓部分で

あるので、相当にくどくなることを覚悟の上で、Giddens 自身の記述を正確に引用しておこう。

①意味作用の構造に関する二重性のサイクル

「相互行為における意味のコミュニケーションは、それぞれに人は何を言ったのか、何を行ったのかが参加者に了解されるような解釈図式の使用を含んでいる。そうした認知図式の適用は、相互的な知識の枠組みの中で、ある共同体の中で共有されている（意味作用 *signification* に関する）認知的秩序 *cognitive order* に依拠し、そこから引き出されている。しかし他方では、解釈図式の適用は、そうした認知的秩序からの引用を行うさいに、同時にその秩序を再構築しているのである。」⁽²⁶⁾

②支配の構造に関する二重性のサイクル

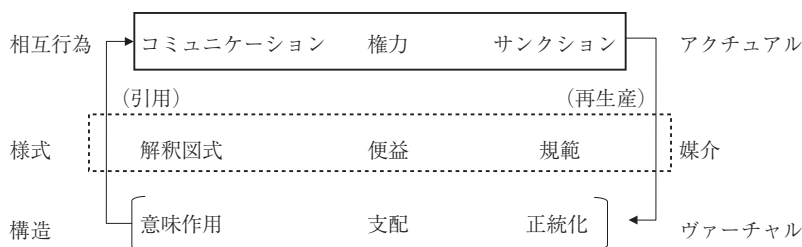
「相互行為における権力の使用は、参加者がそれによって他者の行動に影響を与えることで成果を生み出すことを可能にする便益 *facility* の適用を含んでいる。この便益は、（共同体の）支配の秩序から引き出されると同時に、それらが適用される際に、支配の秩序を再生産している。」⁽²⁷⁾

③正統化の構造に関する二重性のサイクル

「最後に、（サンクションを用いて）相互行為を道徳的に構成することは、（共同体で共有されている）正統的な秩序から引き出される規範の適用を含んでいるが、そうした適用を行うことで正統秩序の再生産を行っている。」⁽²⁸⁾

二重性のサイクルを理解するうえで、さらに重要なポイントは、これら三つの構造（意味、支配、正統化）の相互関係は、現実の社会においては、はっきりと分岐することなく、相互に重っている、ということである。行

図2 3つの構造の「二重性」



出典：CPST、p.82の図を再構成

為者が構造に従って相互行為を行うために依拠する三つの媒介様式（解釈図式、便益、規範）についても、Giddens は、これらが実質上の区分というよりは分析上の区分であると述べている。Giddens による三つの概念セットのマトリクスに若干の説明を加えて図式化すれば、図2のようになる。図2は、図1で示された構造と行為主体性の関係をより具体的に分析するために三つの構成要素に分解した場合の図式である。

二・二 二重性概念の社会理論的な意義

Giddens は「そもそも社会が存在するとはどのようなことであるのか」、という社会の存在論ともいえるべき究極の問いを設定して、社会に関する認識論において従来支配的であった、「構造か行為か」という二元論 (dualism) に陥ることを排し、「社会は構造と行為の二重性 (duality) によって成り立っている」という答え⁽³⁰⁾を提出した。この答えは、Giddens の社会理論の生命線ともいえる最も重要な命題である。Giddens は構造と行為の関係に関して、「どちらがどちらを根拠付けているのか」という従来の西欧社会科学が拘泥してきた認識論的な基礎付け主義の問題設定を棄却して、「構造が構造であるのは行為主体がそれを構造として使用し、それに従って行為を続けているからである」というところに社会という存在の本

質を見出した。社会は自己循環的で再帰的な存在であるという社会的存在論を打ち出し、構造と行為の二重性概念によって従来の二元論的な社会理論の限界を突破しようとした点に Giddens の社会理論の獨創性、卓越性があることについては、ポストギデンズの研究者からもほぼ共通に承認されている。³¹⁾ ポストギデンズにおける構造化理論の展開について考察する前に、社会理論の世界における「二重性」概念の意義に関する筆者自身の理解を示しておくことにしよう。

すでに言及したように、西欧の社会科学は、社会を全体または集合体の側から基礎付けて説明するか、それとも個人の側から基礎付けて説明するか、という西欧に固有の認識論的なアポリアによって長らく悩まされてきた。前者の立場に立てば、社会を認識する上で重要な対象物は、全体社会を構成する制度、システム、構造などであり、個人の行為、性向、意識などは、社会全体のあり方から派生する事象とみなされる。後者の立場に立てば、社会を認識する上で重要な対象物は、個人の行為、性向、意識などであり、社会の制度、システム、構造などは、それぞれが独自の性向や意識を持った自律的な存在である個人による行為の集計として現れる派生的な事象にすぎない。前者の立場をさらに徹底させれば、社会が個人の行為を決定する、という社会的決定論ないし物象化、後者の立場をさらに徹底させれば、社会は自己決定能力を持つ個人の自由な選択のみによって説明し尽くすことができる³²⁾とみなす個人還元論ないし主意主義に至る。

物象化と主意主義は社会に関する認識論の二つの両極的な立場を示している。だがこのような両極的な認識論に基づいて記述される社会の姿は、かなり異様なものにならざるを得ないだろう。純粹に物象化の観点を極めるなら、個人は社会的な強制力のもとで自由な選択の余地を持たない操り人形に過ぎないものとして見なされる。社会を認識する営為とは、操り人形を動かしている舞台装置に相当する非人格的な仕組みや、人形の振る舞いを

あらかじめ確定させている劇のシナリオを発見することにはほかならない。他方、純粹に主意主義の観点を極めるなら、社会全体（例えば軍隊）は個人（例えば兵隊）の行為によってすべて説明し尽くされなければならない。従って例えば軍隊と兵隊の関係を考えるにあたって国家、戦争、徴兵制度など、一介の個人の行為だけでは説明しにくい事象はさしあたって認識の対象から排除され、もっぱら兵隊の行為だけから軍隊を説明しようとする地点にまで行き着く。

認識論的な二元論は、以上のような偏った社会像や異様な社会像をもたらすこととなるが、このような二元論は、社会科学の正統な手続きを伴って本格的に展開されることで、一層強固な偏向に突き進む場合がある。前者の立場に固執した社会科学は、社会への認識における法則性を重視した客観主義、研究方法における方法的集合主義として展開され、このことによって社会に関する認識論としての物象化の観点がさらに徹底されることになる。後者の立場に固執した社会科学は、意思決定主体としての個人の選択を重視する主観主義、研究の方法については方法的個人主義として展開され、このことによって社会に関する認識論としての主意主義の観点はさらに徹底されることになる。

さらにこうした二元論が科学的認識を超えて、人々の思想や価値観の領域にまで浸潤した場合、社会科学が本来あるべき姿を大きく逸脱した「危うい言説」が、科学的な装いをもって表明されるような事態がもたらされる。とりわけ筆者の専門領域である雇用関係研究の世界においては、認識論と方法論としての二元論的な両極の立場が思想・イデオロギーと合体することで生まれる「危うい言説」の事例には事欠かない。物象化論的な認識論・方法論が思想としてのMarx主義と結びついた場合に、資本主義社会の賃労働関係における被用者について、もっぱら従属性の観点だけで論ずるという過ち（＝強制説）が生まれる。これとは反対に、主意主義的な認識論・方

法論が思想としての新自由主義と結びついた場合、資本主義的な賃労働関係における被用者について、もっぱら自己決定と自己責任の観点だけで論ずるといふ過ち（＝自発説）が生まれる。このような誤謬が危ういものであるのは、それらがしばしば科学的権威をまもって登場するからである。

Giddens の二重性概念の意義は二元論の議論が向かいがちで、以上のような二つの陥穽を回避し、構造と行為の相互的な構成の図式を示し、構造と行為の両者を取り入れた社会理論の体系を構築していくための道筋を示したことにある。二重性の概念を用いることで資本主義社会の賃労働の実態を強制説や自発説に陥いることなく記述していくことが可能になる。

二・三 二重性概念をめぐるポストギデنزの議論

二・三・一 アーチャーによる批判

認識論的な二元論によって強く制約された西欧社会科学の限界を指摘して、存在論的な二重性の概念によってこれを克服していこうとしたGiddens の着想の有効性については、ポストギデنزの構造化理論の研究者たちの間においても基本的に承認されている。そうした研究動向の中で、Giddens の二重性概念を全面的に批判して、分析上の二元論 analytical dualism の擁護を試みたのが、Archer である⁽³²⁾。

Archer は、Giddens とは異なる独自の概念によってではあるが、主意主義と物象化論（決定論）という社会科学の伝統に対して、Giddens とは同様の批判を展開している。社会科学における主意主義的な伝統に対しては、ミクロな方向に社会の分析を還元させる下向的（合成 downward conflation による融合主義 elisionism と命名し、

物象化論(決定論)的な伝統に対しては、マクロな方向に社会の分析を還元させる上向的合成 upward conflation による融合主義と命名し、この二つの動向を強く批判している。だが同時に Archer は構造の二重性という概念によって主意主義と物象化論を克服しようとした Giddens の試みに対しては、それを中心的合成 central conflation による融合主義として批判し、社会理論としての有効性に疑問を呈している。Archer に「それ」³²⁾ Giddens の理論は、エイジェンシーと構造を平板な(階層化されていない)存在論によって同一地平に押し込め、融合させているために、構造がエイジェンシーから独立した存在であり、創発的な影響力を及ぼすものだ、という事実を受け入れることができない。⁽³³⁾

Archer が二重性概念を批判するさいに依拠している「存在の階層性」、「構造の創発的影響力」という概念は、いずれも Cambridge 大学の科学哲学者である Bhaskar を創始者とする批判的実在論 critical realism と呼ばれる社会学、社会理論の学派において、中心的な位置を占める概念である。Archer は批判的実在論 critical realism の系譜において中心的な役割を果たしている社会学者であり、批判的実在論に固有の、存在の階層性を前提にした深層存在論 deep ontology を根拠として Giddens の存在論それ自体を批判しているのである。だが Archer の議論は存在論のレベルに止まるのではなく、Giddens の二重性をめぐる議論が不完全な存在論に基盤を置いているために、社会理論としても有効性を欠いているという批判も含んでいる。この点に関連して Archer は以下のように述べている。

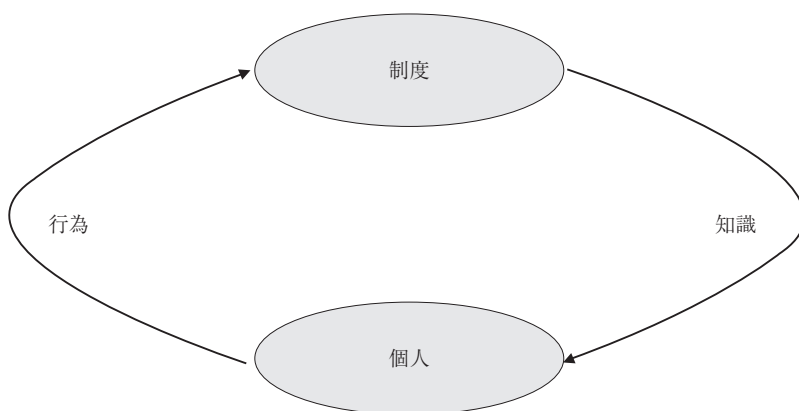
「批判的⁽³⁴⁾」実在論者たちは、社会構造を本質的に関係論的なものであり、しかしまたそれにもかかわらず、その創発的な性質のゆえに実在的なものであると見なすのである。そのような構造の創発的な性質は、その内部で行為するエイジェンツたちに対して影響力を持ち、従って彼らの活動には還元不可能なものなのである。これに

対して(中心的合成による)⁽³⁵⁾融合主義者は、構造と文化を、「社会的実践」によって概念化しようとするのだから、このような関係論による概念化は受け入れがたいことになる。というのも実在論においては、関係それ自身が、実践から区別された性質を、実践に還元できない潜勢力を、実践に対して影響を与える力を持っていると信じられており、また実践者たちに対して先行的に存在するものとみなされているからである。そう考える代わりに融合主義者が必要としているものは、構造が実践へと圧縮されてしまうことなく、実践に対して相対的に自律的な影響力をふるうような、そのような関係的な性格の概念ではなく、構造が社会的実践のなかに含みこまれてしまっているような構造概念なのである。⁽³⁶⁾

以上のようなArcherによるGiddensへの批判に関して、筆者は存在論のレベルで厳密な検証を行うだけの学識を持ち合わせていない。むしろ筆者が注目したいのは、二重性の概念によれば、分析の焦点は常に構造とエイジェンシーを結び付けている「熟達した行為者による社会的な実践」に向けられるしかなく、そのような分析では、構造とエイジェンシーを分離して独立に考察することができない、という社会理論面での批判である。二重性概念を社会理論として展開した場合の科学的な不完備性が問題視されているのである。すなわち、「熟達した行為者の社会的な実践」によって構造とエイジェンシーが融合されている、という二重性概念に依拠する限り、構造化理論では、行為と構造を経験科学的に観察したり、両者の関係性を因果的に分析したりすることが不可能であって、「熟達した実践」の発見と記述は科学とは無縁の観察者の技巧 *tricks* に委ねられることとならざるを得ない。Archerによる批判の要点はこのようなものである。果たしてこの批判は妥当だろうか。

ここで指摘しておきたいことは、Archerによる二重性概念への批判の論法が、かつての旧制度派経済学の研究を主流派経済学が斥けた論法⁽³⁷⁾と同一のものである、という点である。旧制度派経済学は慣習 *habits* に根ざした個

図3 制度における知識と行為のループ



人の行動が制度・institutionを形成するループとして社会を把握すること
を試みた。これに対抗して当時の主流派経済学は、慣習などという経験
科学的に観察することの困難な事象に依拠している限り、「記述的では
あっても非理論的」な研究しかできない、といって斥けようとしたので
ある。旧制度派経済学の制度に関する説明図式は図3のように描くこと
ができる。⁽³⁸⁾このように整理すれば直ちに明らかのように、旧制度派経済
学は、Giddensの二重性概念と共通する発想に基づいて社会を説明しよ
うとしている。慣習、しきたり、文化などの形で制度のなかに貯蔵され
た知識に準拠して、個人が的確な行為を繰り返すことで、制度と個人の
相互的構成のループが継続していく、というのが旧制度学派の社会像で
ある。制度に貯蔵された知識を引き出しつつ、そのことによって制度を
再生産するものとして旧制度派経済学が注目した「慣習などに根ざした
行為」とは、構造化理論における「熟達した行為者の社会的実践」にほか
ならない。

確かに「熟達した行為者の社会的実践」に関して旧制度派経済学が残
した理論的考察は完成度の高いものではなかった。だが、制度論的な社
会理論は現在、経済学のみならず、社会学、組織論、政治学など、様々な
学問領域で復興を遂げている。「熟達した行為者の社会的実践」を科学

的に分析する試みが様々な学問領域で行われるようになっていく。とりわけ、構造化理論の影響を受けた Giddens 以後の社会学理論の世界では、制度あるいは構造のなかに知識が貯蔵されたり、貯蔵された知識が相互行為のなかで実践されたりする仕組みを説明するための学術的な探求が出現し、「知識の社会学」として整理することも可能な研究動向を生み出しつつある。⁽³⁹⁾ この動向はおそらくは Archer が示唆するような非科学的なアートのレベルに止まるものではないだろう。

二・三・二 ムツェリスによる批判

Giddens の二重性概念を批判したもう一人の社会学者が Mouzeis である。Mouzeis は構造とエイジェンシーの関係について、まず言語の事例を取り上げて、以下のような議論を展開している。⁽⁴⁰⁾

言語規則に対するアクターの行為としては、生活者が日常言語を実践することで、その言語を再生産するという場合だけでなく、言語学者が特定言語の言語規則を理論的に研究する場合がある。前者の場合、言語規則という構造とアクターの行為との関係を二重性 duality という概念でとらえることは適切だが、後者の場合は、構造と行為の関係は主体・客体の二元的関係として把握する必要がある。さらに言語規則と発話者の関係に関する第三のタイプとしては、特定言語を保存したり、外国語の影響を排除したりするために、言語規則に関して戦略的に監視しながら発話する、というような場合もある。この場合も言語規則という構造とアクターによる発話行為との関係は、主体・客体の二元的な関係として把握することが適切である。

「もちろん Giddens は、アクターが言語規則に対して理論的で戦略的・監視的志向性を採用することがあることをよく知っている。事実彼は日常的な言語実践の意図せざる結果としての言語の再生産と、ある言語を生かし

ていくための意図的な試みとを明確に区別している。私が言いたいことは、言語の復活に向けた意図的な試みを支えている志向性を構造の二重性という図式によって説明することはできないということ、戦略的で監視的な志向性は明らかに主体と客体の二元性 subject/object dualism を意味しているということ、そしてこの場合、主体としてのアクターは規則に対して、戦略的な介入を必要とする社会的な客体として眺めるために一定の距離をとっている、ということである。……アクターは規則と資源を、それらの実践を通じて（媒体・結果図式を通じて）再生産するばかりではなく、規則と資源を、よりよく理解するために、あるいはそれらを維持したり変容させたりすることに向けて戦略を凝らすために、そうした規則と資源から自ら一定の距離をとることによって再生産する場合もあるということを常に真剣に考慮に入れなければならない。」⁽⁴¹⁾

Mouzelis はさらに、構造（＝規則と資源）と行為の関係を個人レベルと集団レベルに区別して、二重性の概念は、集団的な行為においては当てはまらないことを指摘して、Giddens の議論がこの点でも不十分なものであるとの批判を展開している。

「殆どの場合において、日常生活のルーティンのなかにいる非専門人は主として実践的なやり方で規則と資源に関わり、規則と資源を理論化する時間も志向もないし、戦略的な介入を通じて規則と資源の全体的状態に影響を与える力も持っていない、というふうにいえるかもしれない。しかし、非専門人が日々の実存において規則と資源に対する戦略的で監視的な志向性を括弧に入れてしまう傾向にあることは真実であるとしても、分析の焦点が個人の行為から集団の行為に移るとき、ミクロの行為からマクロの行為に移るとき、理論的ではないかもしれないが少なくとも戦略的・監視的な観点がますます前面に出現してくる、ということも真実だろう。」⁽⁴²⁾

そうした観点から婚姻に関する規則と資源の事例を取り上げて以下のような考察を行っている。婚姻関係は、

日常生活のなかにいる個々の夫や妻にとっては、ルーチン化された行為の繰り返しであって、そこでは規則と資源を媒体として日常的に婚姻に関わる行為が実践されることで、その規則と資源が再生産されている。個人レベルでの婚姻に関わる行為に関しては、構造と行為の二重性という観点で説明することができる。しかし、婚姻に関する規則と資源に関して、これを保守したり変容させる、という観点から戦略的に取り組んでいる集団的なアクター（女性の権利拡張を目指すフェミニストグループ、伝統的な家族の価値を称揚する宗教的リーダーたち、離婚や中絶に適用される規則を変容させようとする法律家たち、遺産についてのルールを再考している財務官僚たちなど）が存在する。彼ら・彼女らの行為と婚姻に関する規則と資源との関係は二重性ではなく、主体・客体の二元性の関係で理解しなければならない。そして二元性に代えて二重性を、というGiddensの議論を以下のよう⁽⁴³⁾に批判する。

「もしGiddensにならって主体・客体の二元論を社会学の議論において禁止するなら、制度的な秩序がいかにして再生産され変容されるのか、ということについてきわめて不完全な説明を与えるだけで終わってしまうことになる。これではまるで、複雑な建造物の建築を、もっぱら個々のれんが工のルーティンな活動だけに集中し、設計士、エンジニア、管理者、労働組合指導者などを無視して説明しようとしているかのごとくである。」⁽⁴³⁾

二・三・三 ストーンズによる二重性概念の強化・拡張

以上のようなMouzelisによるGiddens批判を踏まえ、これを一層精密に考察し直すことで、二重性概念の意味を強化・拡張することを試みたのが、Stones(2005)である。

Stonesは構造とエイジェンシーの関係に関連して、日常的に構造をごく自然に受け入れて行為を繰り返す中で

構造が再生産される場合もあれば、行為者が構造に対して距離をとって熟慮しながら関わることで構造が再生産されたり変容されたりする場合もあり、両者を区別して考える必要性がある、という Mouzelis の主張については、これを問題なく承認した。だが、前者のタイプの構造と行為の関係についてだけに Giddens の二重性概念の適用範囲を縮小させ、後者のタイプの構造と行為の関係に関しては、主体としての行為者・客体としての構造という二元論の立場で考察する必要があるという、Mouzelis の主張に対してはこれを断固拒否して、あくまでも二重性の概念を擁護しようとする。構造と行為の関係には二つのタイプがあることを承認しつつ、あくまでも二重性概念を擁護するにあたって、Stones が立てた論法は、社会を構成する行為と構造との関係を、「当たり前のこととして受け止められている「二重性」 taken-for-granted duality と「批判的で自省的な二重性」 critical and reflexive duality」という二つのタイプの二重性によって説明する論法である。そしてより大事な点は、Stones が両者の中間には様々な段階があり、構造とエイジェンシーとの関係について、taken-for-granted duality と critical reflexive duality を両極とする連続体⁽⁴⁾のなかで理解する視点を打ち出すことで、Giddens の構造化理論を一層強靱なものにしようとしたことである。

二重性概念の適用範囲を縮小させることなく、二重性の連続体という概念にこだわることで Stones は何を主張しているのだろうか。この点を筆者の理解に基づいて説明しておこう。もし Giddens の二重性概念に対する Mouzelis の批判をそのまま受け入れて、その適用範囲を縮小させてしまうとしたら、それは二つの意味で Giddens の構造化理論の社会学理論としての価値を根底から否定してしまうことになるだろう。

第一には、行為と構造の二重性概念は日常のありきたりな局面においてしか通用せず、構造の二重性とは、行為者が無自覚に繰り返している日常的な行為によって構造が再生産されていることを説明する理論に過ぎないのだ

としたら、その意義はせいぜいのところ、ミクロ社会学的な日常的世界に関する一つの気のきいた洞察という程度のものに止まってしまふ。だが、Giddens によれば日常的行為による社会構造の再生産は行為者の知識能力に支えられた能動的な実践であり、こうした知識能力は行為者が社会に関わるあらゆる行為の基盤となっている。このような知識能力は人間の社会的行為のすべての局面に浸透しているのだから、二重性の概念を社会のすべての局面を貫く連続体としてとらえる視点を放棄することはできない。

第二には、日常世界を離れた人間やその集団に関しては、行為と構造の関係を主体・客体の二元的関係として把握しようとする Mouzelis の命題を容認してしまうと、構造に対して批判的で自省的な姿勢で対峙することができ、さらにはこれを意識的に変容させることのできる主意主義的な人間像に行き着いてしまい、構造化理論の主張は根本から否定されてしまうことになる。だが批判的で反省的な意識は常に意図せざる帰結に制約されている、という構造化理論の基本命題によつて、Mouzelis の命題を拒否することができる。批判的で自省的な行為によつて構造を意識的に作り変えていこうとする志向性を人間や人間の集団が発揮して、そのことがある程度成功するような局面が歴史において全くないわけではないが、それは Stones が示唆するように、二重性の連続体のなかの一つの極限的な場面としてとらえるべきなのではないだろうか。

以上の検討からも明らかなように、Stones の所論は、Mouzelis の Giddens 批判を検討する中から二重性の連続体という発想を取り入れることで、二重性概念の強化・拡張を図ったものである。そしてこの二重性の連続体という考え方は、Giddens の行為主体の理論における論述意識と実践意識の相互浸透という、次節で取り上げる重要な論点とも整合するものである。二重性の連続体、論述意識と実践意識の相互浸透という発想は、「知識の社会学」を構想していく上での根本概念となるものと筆者は考えている。

「二重性」概念の検討については以上で充分だろう。これまでの論考からも明らかのように、二重性の観点を打ち出したことによって、行為主体性および構造に関する Giddens の概念構成は従来にはない独創的なものとなった。この点はどうやらポストゲンズの議論の中でも継承され、発展を続けていると考えてよいだろう。続いて行為主体性と構造に関する考察に順次進んで行こう。

三 行為主体性

三・一 定義

構造化理論とは、構造 structure と行為主体性 agency との再帰的な相互的構成のサイクル（＝構造化のサイクル）という観点を軸に社会を説明する理論である。再帰的な相互構成の両輪における一方の主役である行為主体性 agency に関する理論を構築するうえで、Giddens は西欧社会科学における主体 subject および行為主体 human agent を主題とした二つの理論的潮流を批判的に検討することから出発している。Giddens は、一方において、後期ウィトゲンシュタイン、その影響下にある行為の哲学、現象学的社会学、Mead に始まる象徴的相互行為論など、一連のアンドロサクソン系の行為主体の理論は、構造や制度に関する分析を取り入れたり、社会的な因果性 social causality を説明したりすることに失敗してきたとする⁽⁴⁵⁾。Giddens は他方、構造主義、規範的機能主義などにおける主体の扱いに関しては、「主体に対する客体の優位、行為に対する構造の優位という点で類似⁽⁴⁶⁾」していることを指摘し、Althusser の構造主義的マルクス主義の理論が描く行為主体 agent の像に対しては「構造中

毒者」structural dopes、Parsonsの規範的機能主義の理論が描く行為者 actorの像に対しては「文化中毒者」cultural dopesという汚名を浴びせ⁽⁴⁷⁾、いずれの場合においても、過剰に社会化されて主体性を喪失した現実離れした人間像を想定するに至っている、と批判している。Giddensは以上二つの理論潮流の対立関係を行為主体性に関する「主意主義対決定論」⁽⁴⁸⁾としてとらえ、自らの行為主体性に関する議論を、主意主義と決定論の双方に現れている弱点とともに克服する方向で進めようとしている。

Giddensによる先行理論に対する批判的なテキスト解説は、それ自体が示唆に富む豊かな発想を含んでいるが、この論考ではテキスト解説の部分には深入りすることなく、Giddens自身が行為主体性について、どのような概念を用いてどのような理論の構想を行ったのかについて考えていくことにしよう。⁽⁴⁹⁾

構造化理論における行為および行為主体性の定義としては、以下のような記述が行われている。

「私は行為 action なし行為主体性 agency を世界内の事象の継続する過程に対して、身体を持った存在 corporeal beings が能動的にあるいは熟慮のうえで因果的に介入していく流れとして定義したい。」⁽⁵⁰⁾

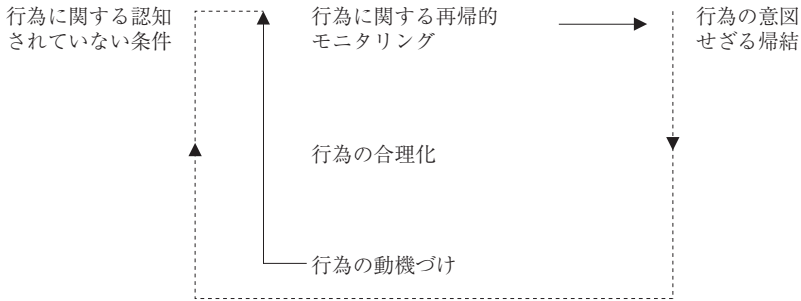
きわめて簡潔な表現ではあるが、前項で取り上げたGiddens理論の生命線である二重性概念との関係で、この定義に関していくつかの説明を加えていくことで、Giddensの行為主体性に関する議論が何を目指しているのかを明らかにしていくことにしよう。第一には、「継続する過程に対して介入していく流れ」という部分は、Giddensが人間の行為を構造化サイクルのなかで、構造を再生産するものとして、経時的に把握する観点を重視していることを示している。経時的に継続される行為の流れのなかから、特定時点を切り出して観察する場合の対象をGiddensは行動 actsと呼んで行為とは区別している。Giddensの構造化理論のなかで行為主体性の概念が占める位置を理解するうえで、行動と行為の区別は重要であると思われる。構造が再生産されるのは行動が加

算されることによってではない。別の言い方をすれば、人間の行為主体性による構造の再生産や変容は、行為者の即興芸 improvisation のような一瞬の行動によるのではなく、自らおよび他者の状況をモニタリングしながら「継続する過程に対して介入していく流れ」として行為を続けていくことによって達成されるのである。

第二に、「世界内の事象に対する因果的な介入」ということで Giddens が表現しようとしているのは、人間の行為が社会に決定されているのではなく、逆に行為こそが社会を変容させる契機である、ということであろう。この点に関連して Giddens は次のように述べている。「行為が行為であるのは、既存の状態や出来事の進行に対して個人が、差異を作り出す、ことができるかどうかにかかっている。行為主体は、もし、差異を作り出す、能力、すなわち何らかの種類の権力を失うなら、もはや行為主体であることをやめる」⁽⁵¹⁾ 権力概念に言及することで、Giddens はこれまでのアングロサクソン系の行為主体の理論に欠けていた社会的な制度や構造との関係で行為を論ずる視点を導入しようとしている。

第三には、「身体をもった存在 corporeal beings」という表現によつて、Giddens は世界内への介入にさいして個体としての人間に課せられている本質的な制約条件について言及していると考えられる。この点に関連して Giddens は、Heidegger の存在論の強い影響のもとで時間地理学と呼ばれる独自の社会理論を展開した Hagerstrand の研究成果に依拠して、以下のような点を具体的に示している。①人間的身体の個性性によって課せられる運動能力や認識能力の限界、②「死に向かう存在」としての個体の生の時間的有限性、つまり時間は個々の行為者にとって希少資源であること、③同時に二つ以上のタスクに参加できないという制約、④空間的移動は同時に時間的移動でもあること、⑤二つの人間の身体が同時に同一空間を占有できないこと。⁽⁵²⁾ これら五項目が、行為主体性が構造を再生産するさいに課せられている存在論的な制約条件である。

図4 行為の階層性、行為の条件と帰結



出典：CS p.5

第四には、「能動的な、あるいは熟慮を持った（介入）」という表現によって Giddens が強調しようとしているのは、構造化サイクルにおいて行為主体が有する「知識能力」 knowledgeability が果たす重要な役割についてである。

『社会の構成』の用語解説において Giddens が示した知識能力についての説明は、「言葉で表現できる知識だけでなく、暗黙的な知識も含めて、行為者が、彼らの行為を生産し、再生産するさいに引用する、彼らと他者を取り巻く状況について知っているすべてのこと」となっている⁽³³⁾。能力の定義として読むにはややわかりにくい表現ではあるが、要するにこのような知識を保有し、状況に応じてそれを運用できることを「知識能力」と解釈しておけば間違いがないだろう。さらに言えば、行為の生産と再生産において引用される「自ら及び他者を取り巻く状況に関する知識」とはこれらの行為の媒体となる構造に関する知識にほかならない。行為主体が世界内事象に対して「能動的な、あるいは熟慮を持った」因果的介入を行うとは、上のような意味での知識能力を活用して構造を感受し、それを引用していくことを表しているのだろう。

以上のように、Giddens の行為主体性に関する理論は、身体的存在としての制約条件下にある知識能力を持った行為者が、時間の経過のなかで、彼らを取り巻く構造を感受して、それを引用しながら行為を続けていくことによって、世界内の事象に因果的に介入していく経路を説明する図式であると

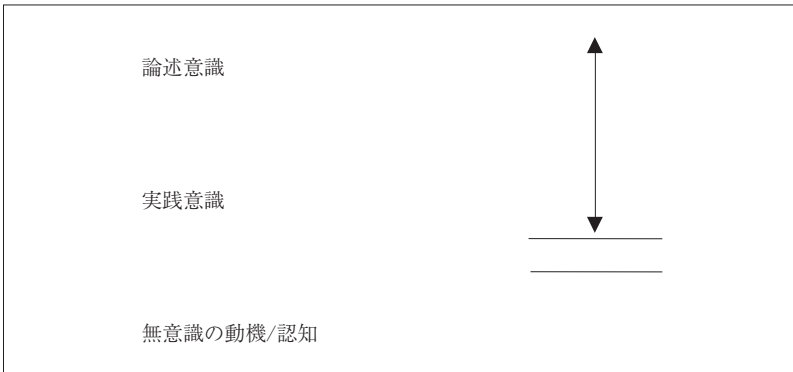
いえよう。ところで Giddens は、以上のような議論に加えて、行為の階層モデルと呼ばれる図式（図 4）を示して、自らの行為理論についてさらに高度な議論を展開している。

この図式によって Giddens は行為理論に関してさらに二つの独自の論点を打ち出している。第一の論点は、「行為に関する再帰的モニタリング」、「行為の合理化」、「行為の動機付け」という三つに分岐した「行為の階層性」という論点であり、第二の論点は、「認知されていない条件」のもとの行為が「意図せざる帰結」をもたらし、その意図せざる帰結が次の行為への認知されない条件として次の時点に引き渡されていく、という「行為における条件と帰結の循環」に関する論点である。この二つの論点について順を追って考察していくことにしよう。

三・二 行為の階層性について

Giddens は図 4 に示されるように、「行為（活動）に関する再帰的モニタリング」、「行為の合理化」、「行為の動機付け」という三つの階層によって行為を説明するモデルを提示している。この三つの階層のなかで、「行為（活動）に関する再帰的モニタリング」と「行為の合理化」は、前者が後者を背景として、それに支えられながら作用する、という密接な関係にある。Giddens によれば、「行為（活動）に関する再帰的モニタリング」とは「毎日の行為の慢性的な側面であり、本人のみならず他者の行動をも含んでいる。すなわち、行為者は自らの行為の流れを継続的に監視しているばかりでなく、他者もまた自らの行為に対して同じようにすることを期待している。」⁵⁴ 他方、「行為の合理化」とは「なぜそのようにするのかを理由付けによって説明する行為主体の能力」⁵⁵のことである。行為者は行為の合理化を通じて自他に向けて表明することができる理由に準拠して、自らの行為に対して継続的

図5 意識の階層理論



出典：Giddens, (1984)、p.7

な再帰的モニタリングを行うのである。

他方、行為の三つの階層のなかで一番底に位置する行為の動機付けという階層は、日常的な行為のなかでは発現することなく潜在している階層であり、通常は再帰的なモニタリングや合理化のプロセスのなかに入り込んでくることはない。この点について Giddens は次のように説明する。「動機付けは、再帰的モニタリングや合理化のように、行為の継続性と直接的に密着していない。……動機は相対的に非日常的な状況、つまり何らかの仕方でのルーティンが破られた状況においてのみ、行為に対して直接的な影響をもたらす傾向がある。大部分の状況において、動機は計画やプログラムを提供している。」⁵⁶⁾

Giddens は以上のような「行為の階層理論」の構想に関連して、心理学的な観点からの考察を重ねることによってその補強に努めている。それが「意識の階層理論」である(図5)。意識の階層理論における三つの階層である論述意識 discursive consciousness、実践意識 practical consciousness、無意識の動機・認知 unconscious motives/cognition は、それぞれ、先の行為の階層理論における「合理化」、「再帰的モニタリング」、「動機づけ」という三つの階層とおおむね対応している。⁵⁷⁾

意識の階層モデルにおいては、論述意識と実践意識は相互に浸透し

合う密接な関係にある（図5の双方向の矢印）が、これらはともに、無意識とは明確に一線を画しているとの理解が示されている（図5の二重線による区分）。論述意識とは「とりわけ自分自身の行為の条件を含む、社会的条件について、話すことないし言語表現を与えられることができるような物事、すなわち、論述的な形態をとる知識（に関する意識）」⁽⁵⁸⁾である。他方、実践意識とは「とりわけ自分自身の行為の条件を含む社会的条件について知っていたり確信していたりするけれども、論述的に表現することができないような物事（に関する意識）」⁽⁵⁹⁾である。別の箇所での実践意識の説明において、GiddensがMichael Polanyiの「暗黙知」に言及していることから示唆されるように、論述意識と実践意識の区分は、Polanyiの区分に従えば、前者が形式知に関わる意識、後者が暗黙知に関わる意識に相当しているようである。⁽⁶¹⁾ 明らかにいえば、この区分はHayekのいう論述内容の知識 *knowing what* と遂行方法の知識 *knowing how* という区分とも対応しているといえる。⁽⁶²⁾

他方、無意識に関するGiddensの説明はあまり充分とはいえない。とはいえ、無意識に関しても、それが論述意識の上に現れることを抑圧する障害が存在していること⁽⁶³⁾、無意識が介在することで、行為を行うにあたっての認知されない条件が負荷され、そこから行為による意図せざる帰結が発生すること⁽⁶⁴⁾、など、知識の社会学を構想していくうえで極めて示唆に富む重要な論点がいくつも指摘されている。

Giddensによれば、行為主体の意識による諸活動のなかで、行為の合理化を背景とする再帰的なモニタリング活動を通じて、構造と行為を繋げることを可能にしている枢要の位置を占めるのは実践意識である。実践意識とは、人間の行為を社会構造との関係で合理的に方向付けていく意識であって、論述的に明示される知識と深く浸透しあいながら、論述化されることのない暗黙知を積極的に動員している。

実践意識が行為と構造を繋げる要であることについて、Giddensは次のような説明を与えている。「相互行為

を生産し、再生産するさいにアクターによって参照される知識のストックは、同時に、アクターが自らの目的、理由、動機を説明するような場合に提供される資源でもある。しかし社会的アクターの知識能力が論述意識 *discursive consciousness* という形で活用されるのは一部分だけに過ぎない。アクターの潜在能力というレベルでは、社会システムの構造特性は、実践意識 *practical consciousness* の中に埋め込まれている。すなわち、アクターは社会生活のあらゆる多様なコンテキストの中におかれても、どのように進んでいくべきかを知っている。⁽⁶⁾

以上のように「行為の階層」に関する Giddens の所論は、「意識の階層」との整合性という点で説明が不十分で曖昧な論点を残している。無意識の階層に潜む動機に関する精神分析的な考察に関しても、その全体像が理解できるようなかたちで充分説得的に展開されているとはいえない。しかしながら、行為の階層理論を展開することで、Giddens が人間の知識能力に関する独自の洞察をさらに先に進めることに成功している点は特記しておく必要があるだろう。Giddens の構造化理論においては、先の実践意識に関する考察からも明らかのように、行為主体のもつ知識能力に極めて重要な意義が認められている。だが他方、行為主体の知識能力はあらゆる制約条件を克服できるほどの万能なものではない、ということが認識されているのである。この点に関して Giddens は以下のように述べている。

「構造化理論によれば、行為の条件が行為者にとって全面的に不透明というような状況はない。なぜなら行為は実践の説明責任を通じて構成されるからである。行為者は常に、その内部で彼らの行動が続けられる構造的フレームワークに関する知識能力を有している。なぜなら彼らは自らの行為を通じてその構造的フレームワークを再生産すると同時に、自らの行動を生み出すさいにその構造的フレームワークを引用しているからである。しかしこの知識能力によって可能になる洞察力には……行為の境界面に関して典型的な限界がある。すなわち、行為

が状況のなかで行われることに伴う限界、暗黙知をどこまで言説化して表現できるか、という点に関する限界、動機づけの無意識的な源泉に関連した限界、行為の意図せざる帰結がシステムの再生産のなかに編入されることによる限界（という四つの限界がある）。」⁽⁹⁶⁾

行為主体の知識能力の意義と限界に言及することによって、Giddens は、彼の行為主体の理論が、主意主義的な個人還元論とも物象化的な社会決定論とも異なる立場に立っていることを示している。上記引用の最後の部分であげられている四つの限界のそれぞれに即して、行為主体性に関する Giddens の理解を示せば、次のようになるだろう。

第一には、社会における相互行為は閉鎖系のもとで行われるのではなく、その相互行為には関与しない様々な人々や事象によって状況づけられた開放系のもとで行われる。したがって社会的な相互行為は、それらの状況によって決定づけられるわけではないし、相互行為に参加する人々の知識能力だけでは克服できない様々な要因によって攪乱させられている。第二には、社会の様々な構造を行為者に感受させる知識能力は暗黙知を司る実践意識に多くを依存している。だがこうした暗黙知を言説によって論述化し、正確な行為の指針として人々の間で共有する、という点で行為者は限界に直面する。そのために、構造を感受する相互知識に関して、相互行為の当事者同士がお互いの行為をしばしば読み違えることがあり、このことが構造の再生産に関する偶発的な変動をもたらすことになる。第三には、人間の行為主体性は動機付けに関する無意識的な源泉から自由ではありえないため、「世界内の事象に対する能動的なまたは熟慮を持った介入」であるはずの行為の流れが、自ら合理的に説明ができない潮流によって翻弄されるような事態が生ずることがある。第四には、行為における意図せざる帰結は、人間の行為主体性に常に随伴する現象であって、行為者は知識能力を高めることでそれに賢明に対応していくこと

ができるようになるが、それを完全に根絶させることはできない。行為における意図せざる帰結は、システムが再生産される際にそのなかに編入され、行為者が未来の行為を継続するさいに認知できない条件として再び発現する、という循環を回避することができない。

この最後の点は、続く三・三で取り上げる「行為における条件と帰結の循環」に関する議論につながる重要な論点である。

三・三 行為における条件と帰結の循環

図4で示された行為の階層モデルにおいて、Giddensは人間の行為主体性に関して、「行為の階層性」と並んでもう一つの重要な議論を提出している。それは行為の階層の始点(左側)と終点(右側)に示された「行為の認知されない条件」と「行為の意図せざる帰結」との間の再帰的なサイクル、つまり階層モデルのヨコ軸で示されている議論である。終点から始点に向けて時間に逆行するかのごとく点線で示された方の矢印は、やや誤解を招きやすいが、Giddensがこの矢印によつて表現しようとしているのは、ある行為がもたらす意図せざる帰結は、その行為者が行為を継続するさいに再び行為の認知できない条件として発現するという時間の進行のなかで現われる循環の構図である。

「認知されていない条件」のもとの行為が「意図せざる帰結」をもたらし、その意図せざる帰結が次の時点での行為に対して認知されない条件として引き渡されていく、という「行為における条件と帰結の循環」に関する論点は、一見すると、これまでに説明してきた構造の二重性の理論とはなじみにくい主張であるかのようにも

見受けられる。もし行為と構造が自己循環的な相互に規定しあう関係によって安定的に推移するのであれば、行為者の知識能力の蓄積が徐々に増進し、そのことによって行為に関する認知されざる条件は次第に克服されていき、従って行為の意図せざる帰結も消滅の方向に向かっていく、というサイクルを想像することも不可能ではないからである。だがどうやら Giddens による構造化という発想において、社会が均衡や秩序に向かっていく傾向を有するという想定は前提されていないようである。行為の階層モデルのヨコ軸によって Giddens が示そうとしたのは、行為者の知識能力の重要性を強調しつつも、そうした知識能力には常に一定の限界があり、行為主体が認知できない条件から開放されることなどありえず、意図せざる帰結が消滅することもありえない、ということなのである。従って、Giddens にとっては「認知されていない条件」のもとの行為が「意図せざる帰結」をもたらし、その意図せざる帰結が次の行為への認知されない条件として次の時点に引き渡されていくという循環構造は、社会が構造の二重性によって動いていくかぎり避けることのできない事態であり、この循環図式がどのように動いているのかを把握することこそが社会学理論の最も重要な課題となるのである。

構造の二重性のサイクルに伴って生じる、行為の「意図せざる帰結」が次の行為へ「認知されない条件」として引き渡されていく循環図式について、Giddens は必ずしも整除された論考を行っていない。この点については様々な箇所でも断片的に取り上げられている事例を拾い集めて論旨を再構成することを試みる必要がある。そこには二つの系列の議論が混在しているように見受けられる。

第一の系列の議論は日常の生活世界の日々の実践に関する事例に関する考察である。たとえば、言語に関しては「私が英語を正確に話すのは意図的にそうしているのだが、そうすることで言語の再生産に貢献しているのは意図的ではない」と述べ、言語の発話という行為の意図せざる帰結として、次の世代の行為の条件となる言語

の再生産をもたらしている、という例を挙げている。⁽⁶⁷⁾ Giddens が明言していないもう一つのことを補足しておく、言語の再生産が次の世代にとっての行為の条件となる場合に、それが「認知されない」条件であるというのは、言語の範疇的な規則は発話行為者が日々の発話のなかでは決して認知することのない条件であるという点である。すなわち、言語の範疇的な規則は、発話行為者にとっては本人の正確に話そうとする意図とは関わりなく作用しているという意味で、「認知されざる条件」となる。

Giddens は、同様の事例として、未開の部族社会において実践されている集団的な雨乞い儀式という行為の事例を取り上げている。⁽⁶⁷⁾ そこで指摘されているのは、集団的な雨乞い儀式の実践が、意図せざる帰結としての集団の維持という帰結を生み、そのことが雨乞い儀式という行為を継続させていくさいに本人たちが認知していない行為の条件として作用している、という循環の図式である。さらには、男性の女性に対して向ける眼差しのあり方が、意図せざる帰結として、社会に深く根付いたジェンダー権力という構造を再生産している（そしてそのことが男女の間の日常的な相互行為に対する認知されざる条件として次世代に引き渡されていく）、といった考察も行われている。⁽⁶⁸⁾

以上の事例はいずれも、「行為の認知されざる条件」が過去から引き渡されることによって行為や構造が安定的に再生産されるという事例であるが、Giddens は意図せざる帰結に関して、他方では、行為のアクション効果（電灯をつける→侵入者が逃走する→巡回中の警察官が逮捕する）、サラエヴォ事件の帰結、現代の大都市における民族集団同士の棲み分け、などの事例も取り上げて、ある行為の意図せざる帰結が行為の認知されざる条件として次々に引き渡されていく中で、日常の生活世界や広範な社会システムの変容がもたらされる事例についても言及している。だが前者の系列の議論と後者の系列の議論の関係については、必ずしも整合的な説明を行って

いない。

(以下次号)

文献リスト

※本文中では Giddens の著作に関して、構造化理論に関する主要著作に限って略称で表記している。

Archer, M.S. (1982) "Morphogenesis versus Structuration," *British Journal of Sociology*, vol.33, No.4.

—— (1995) *Realist Social Theory: the Morphogenetic Approach*, Cambridge University Press. 佐藤春吉
訳 『実在論的社会学理論：形態生成論アプローチ』青木書店 二〇〇七年

Bhaskar, R. (1979) *The Possibility of Naturalism: A Philosophical Critique of the Contemporary Human Sciences*,
Harvester. 式部信 訳 『自然主義の可能性：現代社会科学批判』晃洋書房 二〇〇六年

Carrabine, E. (2000) "Discourse, Governmentality and Translation: Toward a Social Theory of Imprisonment,"
Theoretical Criminology, vol.4 no.3.

Cohen, I. J. (1989) *Structuration Theory: Anthony Giddens and the Constitution of Social Life*, Macmillan.

Cooley, J., et. al. (2000) "Managers, Innovation and the Structuration of Organisations," in Stephen Ackroyd and
Steve Fleetwood, eds., *Realist Perspectives on Management and Organisations*, Routledge.

Giddens, A. (1971) *Capitalism and Modern Social Theory: An Analysis of the writing of Marx*, *Durtheim and Max
Weber*, Cambridge University Press.

- (1976) *New Rules of Sociological Method*, Huchinson and Co. 松尾精文・藤井達也・小幡正敏 訳
『社会学の新しい方法規準・理解社会学の共感的批判』而立書房 一九八七年
(文中ではNRSと略記。引用はすべて九三年に出版された原著第二版によった。)
- (1977) *Studies in Social and Political Theory*, Hutchinson and Co. 宮島喬ほか 訳『社会理論の現
代像：デュルケーム・ウェーバー・解釈学・エスノメソドロジー』みすず書房 一九八六年
(文中ではSSPTと略記)
- (1979) *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Theory*,
Macmillan Press. 友枝敏雄・今田高俊・森重雄 訳『社会理論の最前線』ハーベスト社、一九八
九年
- (文中ではCPSTと略記)
- (1981) *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, Macmillan Press.
(文中ではCCHMと略記)
- (1982) *Sociology: Brief but Critical Introduction*, Macmillan Press.
- (1984) *The Constitution of Society*, Polity Press.
(文中ではCSと略記)
- (1985) *The Nation-State and Violence*, Polity Press. 松尾精文・小幡正敏 訳『国民国家と暴力』
而立書房 一九九九年
- (1990) *The Consequences of Modernity*, Polity Press. 松尾精文・小幡正敏 訳『近代といかな

る時代か…モダニティの帰結』 而立書房 一九九三年

—— (1991) *Modernity and Self Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press.

—— (1992) *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Society*, Polity Press. 松尾精文・松川昭子 訳 『親密性の変容：近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズム』 而立書房、一九九五年

—— (1993) *New Rules of Sociological Method 2nd ed.*, Polity Press.

—— (1994) *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*, Polity Press. 松尾精文・立松隆介 訳 『左派・右派を超えて：ラディカルな政治の未来像』 而立書房 二〇〇二年

—— (1995) *Politics, Sociology and Social Theory*, Polity Press.

—— (1996) *In Defence of Sociology: Essays, Interpretations and Rejoinders*, Polity Press.

—— (1998) *The Third Way: The Renewal of Social Democracy*, Polity Press. 佐和隆光 訳 『第三の道』 日本経済新聞社 一九九八年

—— (2000) *The Third Way and Its Critics*, Polity Press. 今枝 法之・干川 剛史 訳 『第三の道とその批判』 晃洋書房 二〇〇三年

—— (2002) *Where Now for New Labour?* Polity Press.

—— (2007) *Europe in the Global Age*, Polity Press.

Granovetter, M. (1985) “Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness,” *The American Journal of Sociology*, Vol.91, No.3.

- Hayek, F. A. (1973) *Law, Legislation and Liberty: vol. 1 Rules and Order*, Routledge and Kegan Paul. 矢島鈞次・水吉俊彦 訳 『法と立法と秩序 (1) ルールと秩序』春秋社 二〇〇七年
- Hodgson, G. M. (1998) "The Approach of Institutional Economics," *Journal of Economic Literature*, Vol.36, No.1. — (1999) *Economics and Utopia: Why the Learning Economy is not the End of History*, Routledge. 若森章孝 他 訳 『経済学とユートピア：社会経済システムの制度主義分析』ミネルヴァ書房、二〇〇四年
- 岩井克人 (2006) 『資本主義から市民主義へ：貨幣論・資本主義論・法人論・信任論・市民社会論・人間論』新書館
- Marx, K. (1852) *Der 18. Brumaire des Louis Bonaparte*. 植村邦彦 訳 『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』太田出版 一九九六年
- Mouzelis, N. (1991) *Back to Sociological Theory: The Construction of Social Order*, Macmillan Press.
- Orlikowski, W. D. (1992) "The Duality of Technology: Rethinking the Concept of Technology in Organization", *Organization Science*, Vol.3 No.3.
- Polanyi, M. (1967) *The Tact Dimension*, Routledge & Kegan Paul. 高橋勇夫 訳 『暗黙知の次元』ちくま学芸文庫 二〇〇三年
- Seo, Myeong-Gu and W.E. Douglas Creed (2002) "Institutional Contradiction, Praxis, and Institutional Change", *The Academy of Management Journal*, Vol.27, No.2.
- Sewell, W.H. (1992) "A Theory of Structure: Duality, Agency, and Transformation," *The American Journal of*

Sociology, Vol.98, No.1.

Spybey, T. (1984) "Traditional and Professional Frames of Meaning in Management," *Sociology*, vol.18, no.4.

Stones, R. (1988) *The Myth of Betrayal: Structure and Agency in the Non-devolution of the Pound 1964-67*, Ph D

Thesis, University of Essex.

——— (2005) *Structuration Theory*, Palgrave.

Wittgenstein, L. (1963) *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge and Kegan Paul. 奥雅博 訳 『論理哲学論

考』(Wittgenstein 全集第一巻) 大修館書店 一九七五年

(1) 構造化理論に関する最も重要な著作は Giddens (1976) = NRSM, Giddens (1979) = CPST, Giddens (1984) = CS
である。

(2) 史的唯物論の現代的批判という標題のシリーズとして、以下三冊に分けて刊行された著作がそれである。この三
分冊シリーズは社会学理論というよりは歴史社会学的プロジェクトと呼ぶのがふさわしい内容である。その一冊目の
冒頭では、構造化理論の要点が一〇項目にわたって説明されている。Giddens としてはすでにこの時点で、構造化
理論に関する理論的な考察に決着をつけたとの意識があったものと推察される。Giddens (1981) = CCHM, (1985),
(1994)

(3) Giddens (1990), (1991), (1992)

(4) Giddens (1998), (2000), (2002), (2007)

(5) Stones (2005) p.13

- (6) Stones (1988)
- (7) Spybe (1984)
- (8) Carrabine (2000)
- (9) Coopey et al (2000)
- (10) Orlikowski (1992)
- (11) Archer (1982), (1995), Cohen (1989), Mouzelis (1991), Sewell (1992)
- (12) Stones (2005) だが Giddens の構造化理論の批判的な検討を通じて、これを補強した自らの理論を「強力な構造化理論」Strong Structuration Theory として提示している。
- (13) Bhaskar (1979) pp.27-32
- (14) Giddens (1995) chapter 4 "Durkheim and the Problem of Individualism."
- (15) Giddens (1971)
- (16) CS p.xxi. Giddens 自身も引用しているが、この部分の原文は以下のとおりである。Die Menschen machen ihre eigene Geschichte, aber sie machen sie nicht aus freien Stücken nicht unter selbstgewählten, sondern unter unmittelbar vorgefundenen, gegebenen und überlieferten Umständen.
なお訳文は Marx (1852) 邦訳書七頁によった。
- (17) Giddens はこのほかに、構造化理論を用いた歴史社会学的プロジェクトの最初の著作である『史的唯物論の現代的批判』の冒頭においても、自らの社会理論の特質をわかりやすく説明するために、同じくこの警句を引用している。CCHM p.16

- (18) NRSМ pp.128-129
- (19) CPST p.5
- (20) Giddens (1982) p.37
- (21) SSPT p.129
- (22) なお、この支配構造は人間の物質に対する支配と人間の人間に対する支配とに分岐しており、それぞれの支配構造は行為主体が配分的資源 allocative resource と權威的資源 authoritative resource を引用して相互行為を行うことを通じて再生産されている。
- (23) SSPT pp.132-133, CPST pp.81-83
- (24) CPST p.82
- (25) 岩井克人(二〇〇六)は、Giddens と同様の発想から、社会と人間を相互に構成しあう二重性の関係として捉える社会理論を示している。そして二重性によって社会を成立させる三つの根源的な要素は言語と貨幣と法であり、それ以外の要素もあるかもしれないが、今のところ他の要素を考えることはできない、と述べている。岩井氏は貨幣・法・言語の「二重性」に関連して、貨幣(法・言語)が貨幣(法・言語)として通用するのは、それがすべての人に貨幣(法・言語)として受け入れられているから、という「自己循環論法」(同書二二八頁)の基本命題を提示している。
- (26) NRSМ ed. p.129 括弧内は筆者による補足。
- (27) Ibid., p.129 括弧内は筆者による補足。
- (28) Ibid., pp.129-130 括弧内は筆者による補足。

- (29) 構造化理論に固有のこのような問いの立て方に関しては、Heidegger の影響が大きい。
- (30) 構造化理論に固有のこのような論法に関しては、Wittgenstein の影響が大きい。Giddens は Wittgenstein の「規則を知るといふことはいかに続けていくかを知ることであり、つまり規則に従ってプレイしていく方法を知ることである」という『哲学探究』=Wittgenstein (1953)での論考から多くを学んでいる。(CPST p.67) 規則を構造と言ひ換え、プレイを行為と言ひ換えれば、Wittgenstein の上記の命題は Giddens の構造化理論の命題と正確に対応するものであることがわかる。
- (31) そうしたなかで、Archer は、例外的に Giddens の社会理論に関して、その基盤にある存在論にまで遡って批判的な考察を展開している。Archer は「構造化」ではなく形態生成のアプローチによって構造と行為を分析上切り離して二元的に扱う方法を提唱している。Archer (1982) p.458.
- (32) 構造化理論を批判し、対抗するアンチテーゼとして Archer が提示しているのは形態生成論アプローチと呼ばれる理論である。構造化理論対形態生成論という対抗図式を本格的に打ち出した最初の論文が Archer (1982)であり、後者の全体像を体系的に示した著作が Archer (1995)である。
- (33) Archer (1995) chapter 4
- (34) 倉田による挿入。批判的实在論者とは、Archer 自身の存在論、社会理論の立場を指す。
- (35) 倉田による挿入。中心的合成による融合主義者とは、ここでは、構造を行為者の社会的実践によって概念化しようとする Giddens の構造化理論に対する Archer の解釈のことを指している。
- (36) Archer (1995) p.106
- (37) Hodgson (1998) p.166

- (38) Ibid, p.176 の図を参照した。なお Hodgson は旧制度派経済学の制度論に関する説明図式を行為と情報のループとして描いているが、筆者は「情報」を「知識」に置き換えている。
- (39) Giddens の構造化理論を筆者のいう知識の社会学という方向へと繋げていく理路を示した論考として、例えば Orlikowski(1992)による「技術の二重性」というモデルがある。他方、知識の社会学という構想は、構造化理論と近接する別の理論潮流からも大きなインスピレーションを与えられている。例えば、新制度学派経済学者の Hodgson による知識と雇用に関する議論もまた、筆者の「知識の社会学」と類似した視点から展開されている。Hodgson (1999) chapter 8. 行った論考については本論文後半の課題である。
- (40) Mouzelis (1991) pp.28-30.
- (41) Ibid, p.30
- (42) Ibid, p.31
- (43) Mouzelis (1991) pp.30-31
- (44) Stones による連続体という発想は、Mouzelis 自身の行為者の知識能力に関する所論を再編成することから生み出されている。Stones は Mouzelis の構造化理論の批判を「Mouzelis に反して」読み替える作業を通じて、逆に構造化理論を強化する議論を展開している。
- (45) CPST p.49
- (46) CPST p.50
- (47) CPST p.52
- (48) CPST p.2

ほぼ同様の議論が Granovetter (1985) によつて「過小に社会化された行為者」under-socialized actor・「過剰に社会化された行為者」over-socialized actor という対立図式として示されている。

- (49) Giddens の著作の中で、行為主体性をめぐる自らの理論についてまとめた記述が行われているのは、① NRSM・第二章「行為主体性、行為の同定、コミュニケーション意図」(七十七―九十九頁)、② CPST・第二章「行為主体性、構造」の前半部分(四十九―五十九頁)、③ CS・第一章「構造化理論の諸要素」における冒頭から「行為主体、行為主体性」および「行為主体性と権力」の項までの部分(一一十六頁)、という三箇所である。

- (50) NRSM ed. p.81
(51) CS p.14
(52) CS pp.111-112
(53) CS p.375
(54) CS p.5
(55) CPST p.57
(56) CS p.6
(57) 行為の階層と意識の階層の対応関係について、Giddens はかならずしも明言しているわけではない。
(58) CS p.374
(59) CS p.375
(60) NRSM p.113 ㊦㊧ p.158
(61) Polanyi (1967)

- (62) Hayek (1973)
- (63) CS p.7
- (64) CPST p.124
- (65) CCHM p.27
- (66) CPST p.144
- (67) CPST pp.210-222
- (68) NRSM p.8

（一橋大学大学院社会学研究科教授）